46

知られざる医史学者・渡辺奎輔

町泉寿郎

渡辺奎輔の名は従来の日本医学史上、殆ど見出されない。以下、奎輔とその一族の伝記と学績を明らかにし、今回発現した奎輔遺稿『日本医史』（北里東医研寄託・岡田昌春文庫所蔵）について報告する。

遠祖は源融（八二二～九五）。渡辺姓は融の玄孫綱（九五三～一〇二五）に起こる。十三世紀に綱十四世の孫直が鎌倉六代将軍宗尊親王に仕えて近江国速水を領有して以来、同地を本拠とした。室町・戦国期には京極氏・浅井氏の配下に入る。浅井氏滅亡後、直十一世の孫統のとき膳所に土着し、俊―房―愛―朗と継承。奎輔は朗の二男である。

奎輔、名は昶、字は奎輔、蘅園・忠軒・虫魚楼・巳任堂と号した。天明元年（一七八一）四月十一日、近江浅井郡高田村に出生。はじめ郷里の儒者種村箕山に師事（一七九三～六）。さらに西国を周遊して土佐・丁野南洋、肥後・村井琴山、筑前・亀井南冥、豊前・倉成龍渚、肥後・斎藤芝山、備後・菅茶山に従学（一七九六～一八〇七）。一時帰郷の際、坪井信道に句読を授け、江戸石町開業時（一八〇八）にも信道を伴う。翌年正月、幕府医官多紀元簡に入門。同門の多紀元堅・軒村主善・小川樫斎と親交。郷里・膳所藩の江戸詰医に召抱えられたが（一八一二）、嫉視を招き門人山本純策を藩医に推挙したことで同僚の中傷にあい辞職（一八二四）。晩年は病気がちで（過飲が原因か）望郷の念を募らせ、儒学の師松崎慊堂に遺子を託し病を押して帰郷、天保三年（一八三二）八月十八日に五十二歳で没した。墓は郷里と東京・長泉院（目黒区中目黒4―12―19）に分葬。著書は『日本医史』三十巻『淡海魚譜』一巻『淡海先賢伝』三巻『獣医須知』『医具小志』『詩話』『医話』各一巻『詩文集』若干巻『博采類輯』『巳任輯方』各十巻『藝園月令』三巻。

奎輔の子孫には漢学者が輩出した。長男（一八二一～七三）は名は魯、字は正風、通称は魯輔、樵山・荘廬と号した。弟とともに松崎慊堂に師事し、唐・開成石経や宋本

爾雅の刊行を扶助。はじめ佐倉藩に仕え、後に紀伊藩儒となり（一八六二）、江戸・京都を奔走して幕末の時務に当たった。

二男（一八二二～六二）は名は璞、字は純叔、通称は璞輔、介堂と号した。慊堂に才学を愛され、伊予西条藩の山井家（始祖は荻生徂徠門下で『七経孟子考文』の著者・山井崑崙）再興の際、慊堂の推薦により山井家を嗣ぐ（一八三七）。崑崙の遺業を継承し足利学校に赴いて古籍の校勘を行った。介堂の跡は淀藩士内田成允の二男重章（一八五二～一九一二、号は清渓、一高教授）が嗣いだ。介堂の女は塩谷時敏（一八五五～一九二五、号は青山、一高教授）に嫁し、温（一八七八～一九六二、号は節山、東京帝大教授）を生んだ。温の弟良は山井重章の養嗣子となり、その長男が湧（一九二〇～九〇、東大教授）である。

最後に渡辺奎輔の主著『日本医史』について考察する。全三十巻とも、また『皇国名医伝』と題し十数巻であったともいうが、岡田昌春文庫伝存は三冊、約三百四十頁の未定稿である。大和医史・皇和医史・日本医史稿・日本医史備考・巳任堂叢抄・忠軒医話などと題するものを合綴する。重複錯雑も多いが、四〇〇名以上の医家伝を収録。古代から中世までは歴代天皇ごとに編年収録し、近世以降は外・眼・針・唖・喉・痘の専科ごとに編集した部分やイロハ順の部分などが混在し、編纂過程の苦心が看取できる。来日中国医や売薬名処方も収録している。編年体と専科を立てる点は先行の黒川道祐『本朝医考』（一六六三刊）に依るが、増補が多い。イロハ順と天皇による編年は本書の特色。収録数では、ほぼ同時期（一八三〇頃）成立の宇津木昆台『日本医譜』七十巻には完全に伝存しても及ぶまい。後出の賀島近信『皇朝医史』（一八四〇代）や浅田宗伯『皇国名医伝』（前編一八五二刊、後編一八七一刊）にははるかに優ったものと考えられる。

（北里研究所・東洋医学総合研究所医史学研究部）